

GEKKAN ORIMOTO

月刊 織本

12月号

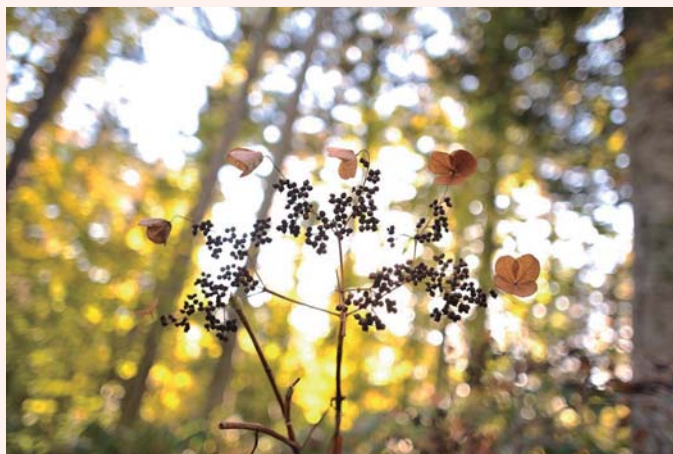
2010年12月1日 Vol.196

発行 医療法人財団 織本病院

印刷 〒204-0002 東京都清瀬市旭が丘 1-261

Tel 042-491-2121 URL <http://www.orimoto.or.jp/>

発行人 高木由利



あなたは美しい

理事長・院長 高木 由利



私の通勤路には、はなみずきの木が街路樹として植えられ、春には美しい白とピンクの花が私の心を和ませてくれました。毎年、そして毎日通る道なのに、今年初めてそのはなみずきが秋になると赤い実をつけていることに気がきました。自分の記憶の曖昧さを恥ずかしく思いました。

* * *

11月13日はナーシングケアセンター（遷延性意識障害者病室）のご家族との懇談会がありました。この会は毎年続けている行事で当日はボランティアの方を含め24名の参加でした。

この病棟に入院される方々は、交通事故や脳血管障害の後遺症、蘇生後脳症により遷延性意識障害となったのです。従って年齢も受傷期間も様々です。小学生の時に受傷された方は30年入院生活を続けていることになります。

さてこの日ご家族の方から、この病棟にご入院されている方は何故こんなに若々しくて美しい肌なのかというお話が出てきました。確かにどの方も色白で肌はツツツ、スベスベでお世話している私達が恥ずかしくなるほどです。例えば、よその病院から転院されて当センターでの生活が始まると、月を追う毎にきれい

になっていくのです。以前は精神的ストレスから解放されているからだと分かったような分からないような返事をしていたのですが、20年お付き合いしていると何となくちょっと違うような気がしてきました。

そこで私は旧約聖書の創世記を読みました。例えば、ノアの箱舟で有名なノアさんは600才まで生きたようです。こんなことがあるのでしょうか。この時代の地球は全体が水蒸気に包まれ、いつも適度な湿度と温度下にあり大気は大変安定状態だったそうです。また、公害などもなくオゾン層の破壊もない訳ですから、人々はいつまでも若々しく長寿だったのかもしれない。アブラハムの妻は90才を過ぎてから出産しています。私はこんなことを読みながら当センターの中を歩いてみました。1年中室温は安定、加湿器により湿度が適宜あり、しかも1日の生活は極めて規則正しいのです。定期的に入浴し、決まった時間に食事が胃に入り、音楽が流れ騒音は全くないのです。この整えられた温度、湿度等の環境がこのセンターの方々を美しくし、いつまでも若々しさを保つ秘訣なのかもしれません。

今日もRさんがピンク色の頬で大きな黒い瞳で私

を見つめて下さいました。何と愛らしく美しいお顔なのか。私は思わずそのスベスベした頬をさわってしま

いました。

高齢者を支えるチーム医療

～地域連携により外来透析が可能になった患者様～

透析センター 看護師 松田 ひなこ



高齢者の透析患者様は合併症も多く、病状の悪化により入退院を繰り返すことがあります。今回、家族と医療者との意思疎通が困難となり在宅ケアを受け入れられず病状が悪化してしまった患者様が、看護師の介入により家族の不安要素を聞き出し、地域連携を図ることで病状が改善し外来透析が可能となったお話をします。

この方は78歳男性で、慢性腎臓病により平成8年に透析導入となりました。既往歴としては、平成16年に脳梗塞、脳動脈瘤、もやもや病、低酸素血症にて在宅酸素療法導入、平成19年に大動脈狭窄症、左内径動脈狭窄症、平成21年には痙攣発作、褥瘡が悪化し、その後4回の入退院を繰り返しています。要介護5で、奥様と2人暮らし。近隣には息子さん、娘さんが住んでいます。

入院時は全身的な痙攣発作を繰り返し、骨盤の中央にある仙骨部には黒色壊死組織があり、主治医より急変の可能性があるという説明を受けていました。抗痙攣剤のコントロールが難しく、薬の量が多いと意識レベルが低下し、少ないと痙攣を起こすという状態でしたが、ご本人と奥様の強い希望により退院されました。入院前は娘さんが透析の送迎をし、自宅でのケアを奥様と共に行っていましたが、就業のため奥様1人で介護を行うことになりました。

受け持ちの看護師が電話で様子を伺ったところ、おむつ交換、褥瘡処置、食事介助などの介護を全て奥様1人でやっているとのことでした。患者様は寝たきり状態なので、在宅看護の必要性を説明しましたが、奥様はその必要性を感じていらっしゃいませんでした。在宅看護の必要性を認識して頂くため、ケアマネージャーに連絡し再度説得して頂きましたが、「知り合いにも同じように介護されている方がいるので自分にも

できる。」と拒否されました。後日分かったことですが、ケアマネージャーに頼んだ透析の送迎の手配が遅れ、結局娘さんが手配したという経緯があり、奥様も娘さんもケアマネージャーに不信感を抱いていたようです。

次に主治医から奥様と息子さんへ病状説明と訪問看護の依頼をしました。主治医の「褥瘡の処置は奥様1人では無理です。プロにケアしてもらう必要があります。」との言葉に「いくらケアマネージャーに来て頂いても、帰った後うんこが出て始末するのは私。どう必要なのかわからない。」と奥様。息子さんが「訪問看護は必要。母は一生懸命やっているが1人では無理。」と言っても「ベッドの差額代が気になって。年金で暮らしているし。本当はこんなこと口に出して言うのも嫌なんです。」と奥様は言われました。

今回のことで、ケアマネージャーへの不信感や金銭的な不安、そして訪問看護の必要性についてご家族がどう感じているのか、また何故拒否を続けているのかを知ることができました。入院時の差額ベッド代は減免することになり、主治医からの更なる説得の後、奥様は「わかりました。」と落ち着いた声で言われ、訪問看護を受け入れて下さいました。退院後に行った在宅療養のための合同カンファレンスで娘さんは「母は父の褥瘡が悪化したのは母のせいだと言われ、一生懸命やっているのにかわいそうでした。退院したらまた悪くなります。陳旧性の圧迫骨折もあると言われ慎重に体を動かしていましたが父も痛がっていました。」と泣きながら話されました。私達医療者側に奥様を責める気持ちは全くありませんでしたが、言い方や説明にも不備があったことを深く謝罪し、骨折は古いものであり痛みは関節の拘縮によるものであると説明しました。

今回のご家族と医療者との関わりにより次のような結果を得ることができました。

- ① 排便コントロールができ痙攣を誘発する便秘が解消した。
- ② 褥瘡処置が強化され治癒した。
- ③ 訪問看護を取入れ廃用性萎縮の悪化防止ができた。
- ④ 外来透析が可能となった。

「1人で大丈夫です。」と遠慮と拒否を繰り返す奥様に対して、私達は更に積極的な関わりが必要だったのではないかと考えます。介護者であるご家族は介護で疲れきっているのです、医療者は家族の苦勞を受け止め、

具体的な社会資源の活用と案内を行い、早期に地域連携を図っていくことが必要であると思います。介護サービスを受けている透析患者様については、当院がほとんどかかりつけ医となっており、透析の受け入れの際には必ずケアプランの提示をケアマネージャーに依頼する事が必須です。

透析という限られた時間の中で患者様やご家族の不安の表出を見出す事は容易ではありません。私達医療者は患者様やご家族が不安を表出しやすい環境づくりに努め、早期に地域連携を図ることが今後の課題です。

当院の腎不全外来に通院していらっしゃる田山さんは、厳密な腎不全食をご自分で調理されています。そして織本病院の腎不全外来患者会“織腎会”の会長をして下さっているのです。



死について

織腎会会長 田山 祐之 様

人間は誰でもいつかは必ず死ぬ。200才まで生きるとか、永遠に生きるという人は1人もいない。私は今まで色々な職業に就いたが最後に勤めたのがタクシードライバーで15年位のドライバー歴で色々な人を見てきた。タクシーの乗客は6割が老人だ。その中には人工透析に通う人もいた。

さて自分も腎不全が発症した時、このまま透析に入ってしまったもいいやと思っていたところ、織本病院に紹介され8年目に入った。初診時、“食事療法をしないと透析に入ってしまう。”と言われて8年経ったのだ。転院してから透析を先延ばしするために腎不全の食事療法まがいのものやっていた。そして食事療法まがいの事をやりながら睡眠薬を多量に処方してもらって、服用すれば楽になるかもしれないと思ったこともあった。でも実際に踏みきる勇気もなかったのだ。

ある時目覚め、普通の人と同じ食事は天国に行ってから食べることにして、真剣に腎不全食に取り組んだ。死という仕事は最後の最後でいいのだ。我々は今一生懸命透析を延ばすために正確な食事療法をしていくべきだろう。私の考えだが、透析していても食事療法せずに普通の人と同じ食事プラス大酒、喫煙しては長くは生きられないように思う。毎日の食事に変化をもたらし、工夫して少しでもおいしい腎不全食を口にできるように、がんばって1年でも3年でも10年でも少しでも長く生きてこそ素晴らしい死を迎えることが満足した人生と思えるのかもしれない。

Orimoto Hospital Christmas Concert 2010



【指揮・指導】
クロイツァー 涼子

【ピアノ伴奏】
只野 なつき

【フルート独奏】
西村 絵梨名

【合唱】
織本病院混声合唱団
ボーイズ・コーロ (男声合唱)
長谷川 充子
真下 孝子
小林 伸子
高橋 典子

— プログラム —

- ハレルヤ : ヘンデル 曲
- サンタルチア : ナポリ民謡
- 帰れソレントへ : クルティス 曲
- ペチカ : 山田耕筈 曲
- 中国地方の子守唄 : 山田耕筈 曲
- 他

織本病院クリスマスコンサート2010

2010年12月18日(土)
14:00開演(開場13:30)
オリモトホール(織本病院4F)
入場無料



腎疾患ゼミナールよりお知らせ

12月の腎疾患ゼミナールは毎年恒例の『クリスマス特別企画 リストランテ・ユリ』を開催致します。誠に申し訳ございませんが、今回は現在腎不全の食事療法に励んでおられる保存期腎不全のご招待患者様のみの参加とさせていただきます。

来年1月からは通常の腎疾患ゼミナールに戻りますので、皆様是非ご参加ください。スタッフ一同心よりお待ちしております。

